

家族だけがケアの担い手ではない②

「家族の中で起こったことは、家族の中で解決すべき」という価値観が根強い日本の社会において、近年は家族のありようが大きく変容しているにもかかわらず、依然としてこの価値観に支配されつづけているために、大きな苦悩を抱えている現役世代が急増しており、そんな事例を紹介しています。



埼玉県で小学校教諭の仕事をしている S さん（45）は、同じ区内の中学校教諭の夫と、中学生と小学生の 2 人の育ち盛りの息子たちに、栄養のある食事を提供してあげることに必死の忙しい毎日です。

S さんの母親は 3 年前に突然のくも膜下出血で他界しました。その数年前に軽い脳梗塞で歩行がやや不自由になっていた S さんの父親（78）は、現役時代は一流企業に勤めるいわゆる亭主関白なサラリーマンで、妻である S さんの母親が専業主婦として、急逝する直前まで夫の身の回りの世話を献身的に担ってきました。

都内近郊の一戸建てで一人暮らしになった S さんの父親は、これまで「おい」と言うだけで身の回りのことも含めてすべて対応してくれる妻がいなくなったことで、その矛先を娘である S さんに向けてようになりました。介護保険を使って介護ヘルパーは定期的に訪問してくれてはいますが、何かにつけて娘である S さんの関与を求めます。父親いわく「育ててやった娘なんだから、それくらい当たり前だ」と。

S さんが小学校での授業の合間にスマホをのぞくと、そのたびに数時間で数十件の不在着信と数件の長い留守番電話メッセージ録音記録されています。S さんは週に数回は、学校の勤務が終わってから片道 1 時間半以上かけて父親の自宅を訪問して料理や洗濯をし、自宅に戻るのは夜半近くになる生活をつづけました。

S さんの夫は「仕事をしているのだから、そこまでする必要はないんじゃないか」と言っていました。S さん自身が「娘なんだからやらなければ」「冷たい娘だという烙印を押されてしまう」という呪縛から逃れることができませんでした。

S さんが疲れ切って父親の自宅に到着したとき、父親から少しでも感謝の言葉があれば違っていたかもしれません。しかし父親からは「遅い」「どうしてもっと頻繁に来ないんだ」「お母さんの味付けと違う」など、S さんの努力を否定する言葉ばかり投げかけられていました。S さんは次第に、スマホの着信履歴を見るのが怖くなっていきました。

その後、S さんはうつ病と診断されるほどまで追い詰められてしまいました。最終的には、S さんの夫が S さんの父親に対して「今後一切、私も妻もお義父さんには関わりません」と絶縁宣言をすることとなりました。

S さんも S さんの父親も「家族だから」という意識に縛られてしまっていました。超高齢社会をむかえ、現役世代の負担が増大する今、「家族だけがケアの担い手ではない」という新しい価値観を推進していかなければなりません。

つづく